

江戸川区のスーパー堤防建設計画は矛盾だらけ

スーパー堤防・街づくりを考える会

検証 こんな「場所選び」はありません

ごく一部ずつしかつけれないスーパー堤防だからこそ、治水上の必要性、緊急度をよく調べて、どこからつくりはじめるか決定すべきです。ところがスーパー堤防の建設用地に選ばれた北小岩についても、すでに建設された平井7丁目についても、それが行われてないようです。

北小岩の場合

- ① 江戸川区が公表している洪水ハザードマップでは区内でもっとも水害を受けにくい地区として表現されています。せっかくのハザードマップを無視した計画です。
- ② 既存の堤防は広くて緩い^{〇〇}法面を持ち、規模も強度も区内で第一級のものです。（写真）
- ③ 広い河川敷があり、洪水時には急激な水位の上昇を抑えて堤防を守ります。
- ④ スピードを出しすぎた車は曲がりきれずにカーブの外側のガードレールに衝突しますが、内側には衝突しません。北小岩はカーブの内側の滑走斜面側に位置し、濁流に攻撃されません。またもともと地盤がしっかりしている自然堤防の上に堤防があるために地震にも強く、北小岩地区から破堤する可能性は極めて低いと言えます。
- ⑤ 実際、これまで破堤したことがなく、昔からの住民と歴史のある古い街が存在します。



「平井7丁目スーパー堤防」の場合

- ① 昔の中川の流れを人為的に流れを変えられた荒川が横切っています。その部分につくられた堤防はどうしても他より弱くなります。そこを補強せず上流側の隣接部分にスーパー堤防を建設したために、強いスーパー堤防をよけた濁流がすぐ脇の弱い部分に集中します。建設によりむしろより危険な状態にしてしまいました。



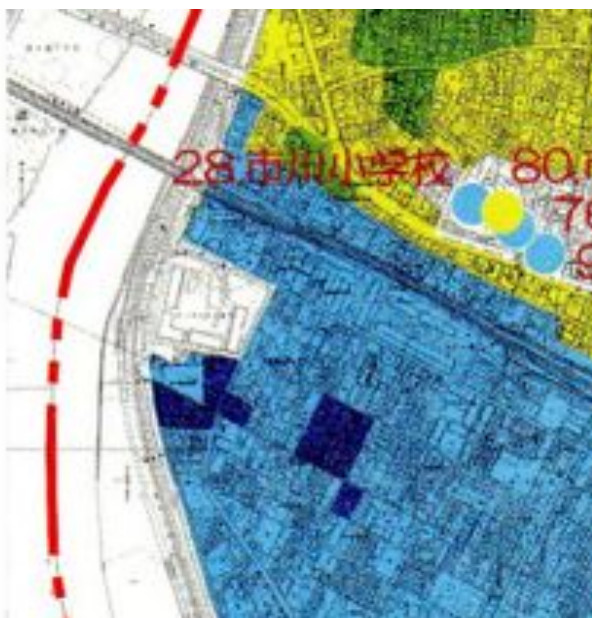
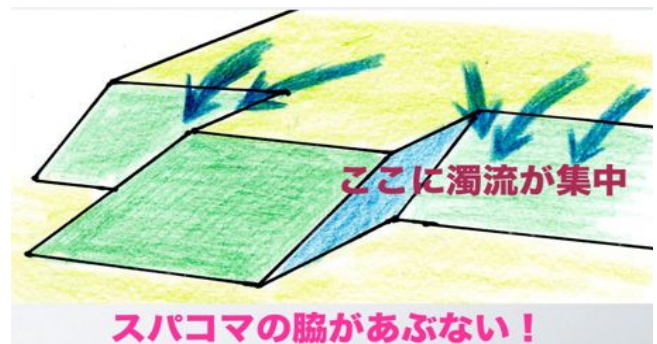
- ② 工事を始めてから「汚染土壌」の存在を知り、あわてて大幅な計画変更をし、余計なお金を使いました。候補地選びのための調査をせずに最初から建設用地を決めていた疑いがあります。



- ③ スーパー堤防の必要条件である極めて緩傾斜の裏法面がつかれない場所を敢えて選び、左の写真のような垂直な裏法面の「スーパー堤防」を「完成」させました。前原大臣の視察時に見せないつもりだったことから、「確信犯」だったことがうかがえます。

検証 「スパコマ」の問題点

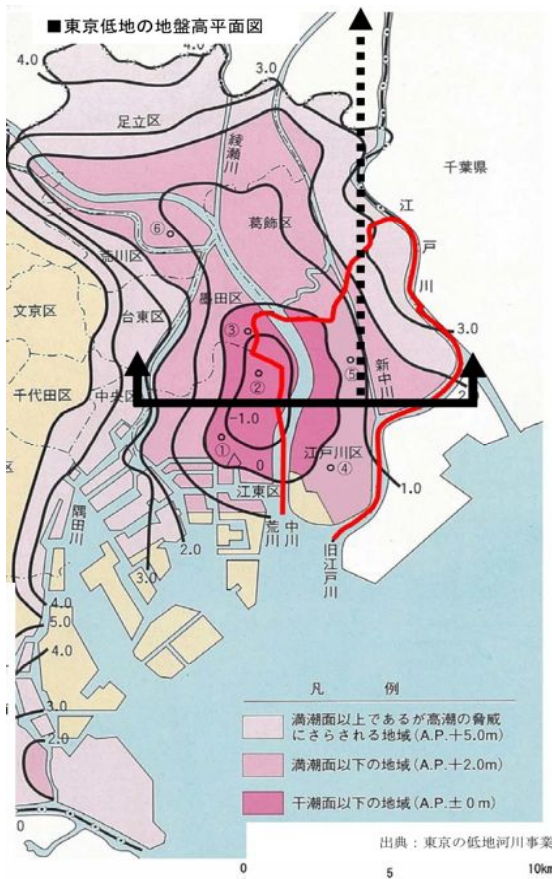
- ① 「スパコマ」とは細切れのスーパー堤防という意味で私たちがつくった造語です。なぜこんな造語を使うのかというと、治水の効果を謳っているのは完成した連続堤のスーパー堤防であって、実際につくられるのはスパコマだからです。両者はまったく別物です。
- ② 連続した堤防は右の第1図、第2図のように一様で特に弱い部分はできません。ところがスパコマは第3図のように部分的に強化された堤防です。一部分だけ強くなると必然的に弱いところができます。洪水であふれた水はスパコマをよけるように流れます。そのためにスパコマの脇は洪水の流れが集中しやすく、その近くに住む住民に新たな不安が生じることとなります。
- ③ 平井7丁目のスパコマでもそこをよけるように流れて、すぐ下流側に隣接した旧中川の流路部分を襲うことでしょう。スパコマが旧流路を埋め立てた住宅地に洪水流を誘導する働きをされると考えられます。
- ④ 市川駅の西にあるスパコマでは建設後につくられたハザードマップにその不安が現れています。スパコマのすぐ脇にまわりより水が集中すると予想されています。



水色の部分は水深1m～2mの浸水、濃い青色の部分は水深2m～3mの浸水が予測されています。



検証 江戸川区民の命と暮らしを守る治水対策になっているのでしょうか？



左の図は江戸川区のHPにあるものです。たしかに水の集まりやすいところですが、この図から内水対策の緊急性は感じられてもスーパー堤防の必要性は感じられません。破堤を心配するとしても江戸川よりもまず荒川、それも地盤が低く、かつ軟弱なところですが、しかしそこで本当に心配されるのは破堤ではなく、「内水氾濫」です。

ゼロメートル地帯では内水対策が緊急の課題だということは今や常識的なことです。内水というのは堤防の内側の水という意味です。昔は川を封じ込めるように川に沿って堤防をつくれませんでした。家のあるところを囲むように堤防をつくったのです。したがって家のある側が堤防の内側で、川の水は外側の水だから外水となります。普通に川が氾濫する場合は外水氾濫となります。ところが外水氾濫は普通ではなくなりました。今は内水氾濫が多く、特に江戸川区のように河口に近いところは内水氾濫ばかりです。内水氾濫が多くなったのは流域の浸透の能力と保水の能力が衰えたからです。大雨が降っても水はいきなり川に流れません。まず豊かな土に浸透し、ごくゆっくりとした地下の流れとなり、保水されます。また、田んぼや溜池も保水に活躍します。しかし日本の第一次産業が廃れ、

産業構造が変わる中で山の森林が荒れ、里山の雑木林が開発され、棚田や平野部の水田が減りました。平野部は市街化され、建物や舗装が地表を覆って雨の地表からの浸透を妨げました。雨はたちまち川へ直行です。

これに対抗してダムや堤防強化で川をコントロールしようとするを「河道内制御」と言います。今や時代遅れの考え方です。つまり川を力づくで封じ込めるやり方で、結果として堤防はどんどん高く、強くなり、川の水位は上昇してしまいました。スーパー堤防も「河道内制御」の立場に立っています。本流の水位が高くなると困るのは支流です。地域の排水の役割を担う中小河川の支流は本流に流すことで成り立ちますが、本流のほうが水位が高くなれば逆流がおこります。そこで仕方なく合流点に水門を設けて閉めます。逆流は防げましたが支流の流域の水は行き場がなくなり支流は氾濫します。支流は本流の堤防の内側にありますから、これが「内水氾濫」です。この内水の処理はポンプで強制的に汲み上げて本流に捨てられることが多く、下流ほど水が集まり内水氾濫がおこりやすくなります。江戸川区は最下流に位置しますから深刻な問題です。しかも海より低いゼロメートル地帯があり、人為的に排水しなければならない宿命を背負っています。にもかかわらず江戸川区の行政は内水氾濫の危険性を恐ろしいほど過小評価しています。このままスパコマづくりにつけていけば内水対策は手遅れとなり、区民の命と安全はますます脅かされることでしょう。

- ① 江戸川区の治水対策はスーパー堤防一辺倒で、極めて偏向しています。
- ② 外水による水害だけが危険だと事実を歪曲し、内水氾濫を過小評価して有効な内水対策をとっていません。

★お隣の市川市の内水対策はなかなかのものです。興味ある方は下記へ

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/gre02/1111000033.html>